

大会報告



第12回品質工学技術戦略研究発表大会実施報告

RQES2019A 実行委員会

2019年11月22日(金)、東京千代田区の星稜會館においてホールにて、第12回品質工学会品質工学技術戦略大会を「あらゆる分野に評価でイノベーションをーITとの結合で進化する品質工学ー」の大会テーマの下で、宇宙航空分野と自動車分野に焦点をあてて開催した。参加者は125名(昨年と同数)であった。品質工学会会長 谷本 勲の開会挨拶のあと、品質工学会副会長 浜田和孝の基調講演をおこなった。宇宙航空分野では、品質工学のJAXA標準作成にみられるロバスト設計への期待、イプシロンロケットの自律診断とGPSデータを活用した地震予測へのMTシステムの適用事例と今後の展開を、自動車分野では、新領域(MBD, AI)と品質工学との結合の現状と将来像を、参加者とともに議論を行った。招待講演では、ホンダのエンジン開発における品質工学の活用方法と重要性が示された。発表のあとは、登壇者によるパネルディスカッションが行われた。

開会のことば

(一社)品質工学会会長 谷本 勲

挨拶に先立ち、斎藤前会長のご逝去をお知らせする。斎藤前会長の熱意を引き継いで、ここまでやって来られた。哀悼の意を表したい。技術戦略研究発表大会は今回で12回を数える。会員みなさんの協力の賜物である。令和で初めての大会は素晴らしい内容であり、令和の明るい雰囲気のまま進めたい。

平成を振り返ると、データ改竄問題があった。効率良くマネジメントして、その結果として自由の総和を拡大するのが品質工学の目的であるが、力づくになってしまって、しわ寄せが現場に押し寄せた。

結果として改竄問題になった。

これからの技術はロボット化であり、機械と知能が合体合流する。たとえば自動車の自動運転であり、巨大化・複雑化していく。何の対策もなければ、平成の改竄問題どころではない。令和の最大の課題である。今一度、品質工学を再構成するのが今回のテーマであるが、品質工学も進化しなければ対応できない。MBD(Model Based Development)は複雑化への回答である。発表いただくJAXAでは一発勝負で宇宙の果てまでロケットを飛ばす。

平成元年にはベルリンの壁が崩壊し、世界の構造変動があった。それが、今の日本経済の低迷を招いている。平成元年12月、日経平均は史上初最高値を記録した。世の中で起こっていることを認識しないまま、平成30年間を過ごしてしまった。その終わりにデータ改竄問題に至ったとするのは、言い過ぎだろうか。失われた30年そのものだった。われわれに残された、最大の宿題の回答を提供してもらうことを期待する。

早く平成の宿題を片付けて、令和の命題に力を注いでいきたい。本日の大会がそのスタートになってほしい。活発な議論をお願いしたい。

【基調講演】

品質工学の発展の経緯と今後の研究の方向性ーIT化、デジタル化の視点からの品質工学活用の現状と課題ー

(一社)品質工学会副会長 兼 技術統括部長

浜田和孝

自動車業界を中心に「100年に1度のパラダイムシフト」を迎えている。その原動力はITの進化で